

学内の名木 ～上野校地の樹木～

上野の山にある本学の敷地は、もともと樹木が多く自然味豊かであった。東京美術学校初代校長（事務取扱）となった浜尾新が美術視察の折、ローマのメディチ家の別業跡に設けられた仏国美術学院を見て、そこが市街のなかにありながら、小高いところにあり、河に臨み林を控え、「洵に幽邃で風致のある、一頭地を抜いて居る処」であるのに感心し、そこと似た上野の山の「高潔で茂林のある処」にこそ美術学校は置くべきであると考えてこの敷地を選定したと言われる（『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇第一巻120頁参照）。もちろん、この地を選定した背景にはほかに種々の要因があるのだが、いずれにせよ、美術を学ぶに適した環境が確保されたのは幸運だったと言えよう。

百年を経た現在では樹木の数は大分減ったものの、シイノキ、クスノキ、トチノキ、カラスザンショウ、ボダイジュ、ムクロジ、ホオノキ、ヒマラヤシーダ、タブノキ、ハクウンボク、イチヨウ、モッコク、カヤなどの大木を始めとして多くの樹木がある。このうち、芸大のシンボルとなっている大学美術館脇のシイノキ（スダジイ）は周囲五・七m、高さ約七mで、推定樹齢三百年（六百年説もある）。シイノキとしては台東区で第一番目の、東京都でも第三番目の巨樹である。附属図書館玄関の西にあるトチノキも周囲三・三m、高さ二〇mで、都内では稀な巨木である。平成三年に中村克哉東京農工大学名誉教授による学内の衰弱木調査がおこなわれたが、その報告書は「美術学部の老木を主として調査した。江戸時代の上野の森の面影を残す照葉樹のスダジイの世代が終わろうとする樹生のようなのであるが、そこには未だアラカシ、スダジイの木も残っている。人手の加わったボダイジュ、ムクロジに交じってカラスザンショウ、ヤマハゼなどの落葉樹の多くなっているようである。クスノキの巨樹もある。東京では稀な樹叢であるので保護したいものである。」と結んでいる。

樹齢を一本々々確かめることは困難で、大昔からのものもあれば、巨木の中には新たに植樹されたものもあるのだが、いずれにせよ樹木が多いのは、芸術の学園は「茂林のある処」でなければならないという暗黙の合意のようなものが学校創立以来脈々と人々の心のなかに伝わっていて、それが樹木を大切にしてきた結果に違いない。無下に枝を切ったり、人手を加えたりせず、自然に生い茂らせておくという美術学校時代の方針は、戦後も上野直昭、小塚新一郎ら首脳部に受け継がれた。

学内の樹木について考えるとき、念頭に置くべきことに、大正初期の大がかりな植樹ということがある。東京美術学校では明治末・大正初に校舎の大改築（木造本館と芸芸部校舎、建築科校舎などが建てられ、敷地を分断する公道が敷設された）が行われ、邪魔な樹木が伐採されるなどして景観が一変した。また、改築中の明治四十四年一月二十五日の本館火災により、周囲の樹木のうち六十五本が全焼、二十五本が半焼するということがあった。こうしたことにより、恐らく構内にガランとした殺風景な空間ができたためであろうが、美術学校会計掛が主体となって植樹会を組織し、職員、卒業生、在校生に呼びかけ、折からの開校満二十五年記念の一環として植樹を行ったのである。その記録が『東京美術学校校友会月報』に掲載されており、このことは『東京芸術大学百年史』（東京美術学校篇第二巻590頁）でも簡単に触れているが、ここにあらためて先人の篤志を後世に伝えたい。

◆「東京芸術大学百年史」美術学部篇より



学内の古道



㊦ シイノキ

ブナ科のシイとよばれる常緑高木の総称。暖地に自生。葉は堅く楕円形で、表面はつやがあり、裏面に褐色毛をもつ。初夏に開花。実はどんぐりになり、食用。しいがし。しいのき。

《季 実=秋 花=夏》「丸盆の一にむかしの音聞かむ／蕪村」



㊧ ゲツケイジュ

クスノキ科の常緑高木。全体に芳香がある。多数の枝が分かれ、長楕円形の葉を密生する。雌雄異株で、春、黄色の小花が密集して咲く。葉から香料をとり、干した葉は香料とする。南ヨーロッパの原産で、日本には明治末期に渡来し、各地で栽培されるが雌木は少ない。ローレル。



㊨ ネムノキ

マメ科の落葉高木。東北地方以南の山野に自生。葉は羽状複葉で、互生し、小葉が数十枚並んでつく。夜になると、小葉が手を合わせたように閉じて垂れ下がる。夏、淡紅色の約二〇個からなる頭状の花をつけ、夕方開花し、紅色の長い雄しべが傘状に広がる。豆果は平たい。ねぶのき。ねぶ。ねむ。ごうかん。ごうかんぼく。ごうかのき。

花をつけ、夕方開花し、紅色の長い雄しべが傘状に広がる。豆果は平たい。ねぶのき。ねぶ。ねむ。ごうかん。ごうかんぼく。ごうかのき。



㊩ ボダイジュ

《梵 bodhidruma の音写》シナノキ科の落葉高木。葉は三角状卵形で、裏面は白い。夏、香りのある淡黄色の小花を下向きにつけ、実は球形で堅い。中国の原産で、寺院で1の代用として植える。同属別種にシューベルトの歌曲名として知られるリンデンバウム（セイヨウボダイジュ）がある。《季 花=夏 実=秋》「一の実を拾ひをる女人かな／虚子」

《季 花=夏 実=秋》「一の実を拾ひをる女人かな／虚子」



㊪ メタセコイア

スギ科の落葉高木。高さ三〇メートル以上にもなる。幹はまっすぐ伸び、樹形は円錐形。樹皮は赤褐色で縦に裂ける。葉は線形で羽状につき、柔らかく、秋に紅葉して小枝とともに落ちる。化石は

アジア地域に広く産出するが、現生種は一九四三年に中国四川省で発見された。公園などに植えられる。あけぼのすぎ。



㊫ ホオノキ

モクレン科の落葉高木。日本特産。山林中に自生し、高さ約二〇メートル。葉は大形の倒卵形で、枝先に集まってつく。五、六月ごろ、黄白色の大形の花を開き、強い芳香を放つ。花びらはさじ状で六～九枚ある。材は軟らかく、家具や下駄に利用。葉は食べ物を包むのに用いられた。ほお。ほおがしわ。



㊬ クスノキ

クスノキ科の常緑高木。暖地に自生し、高さ約二〇メートルにもなり、長命。葉は卵形で表面につやがある。五月ごろ、黄白色の小花を密生し、実は熟すと黒色。全体に香りがあり、樟腦（しょう

のう）をとる。クスノキ科の双子葉植物は約一四〇〇種が熱帯から暖帯に分布し、葉は主に常緑で、香りのあるものが多く、タブノキ・ニッケイ・クロモジなどが含まれる。



㊭ カリン

（「榎」とも書く）バラ科の落葉高木。高さ約八メートル。樹皮は緑色を帯びた褐色。葉は卵形。春、淡紅色の五弁花が咲く。実は卵円形で黄色に熟し、香りがあり、生食はできないが菓子の材料にし、また、漢方で木瓜（もつか）といい、薬用にする。材は床柱などに使用。中国の原産で、庭木などにする。からなし。かいどうぼけ。《季 花=春 実=秋》「一の実天賦をとめの薫りの実／草田男」

《季 花=春 実=秋》「一の実天賦をとめの薫りの実／草田男」



㊦ ムクノキ

ニレ科の落葉高木。山地に生え、高さ約二〇メートル。葉は卵形で、縁にぎざぎざがある。五月ごろ、淡緑色の雄花と雌花とが群がり咲く。実は球形で黒く熟し、食べられる。関東以南に分布。材は器具などに、ざらざらする葉は物を磨くのに用いる。むくえのき。むく。

東以南に分布。材は器具などに、ざらざらする葉は物を磨くのに用いる。むくえのき。むく。



㊧ トチノキ

トチノキ科の落葉高木。山地に自生。葉は大きく、倒卵形の五〜七枚の小葉からなる手のひら状の複葉。五月ごろ、白色で紅斑のある花が円錐状に咲く。実は丸く、熟すと三つに裂け、中にある褐色の種子は食用。近縁種にマロニエがある。庭園や街路に植栽。とち。〔補説〕「栃」は国字。

の種子は食用。近縁種にマロニエがある。庭園や街路に植栽。とち。〔補説〕「栃」は国字。



㊨ ケヤキ

ニレ科の落葉高木。山野にみられ、高さは約三〇メートルにまで達し、よく枝分かれする。葉は卵形で先がとがり、縁にぎざぎざがある。春、淡黄色の小花を新しい枝につける。材は良質で、建築・家具などに使用。つきのき。つきげやき。

建築・家具などに使用。つきのき。つきげやき。



㊩ カラスザンショウ

ミカン科の落葉高木。暖地に自生。枝に短いげが多い。葉はサンショウに似て大きい。雌雄異株。夏、淡黄色の小花を円錐状につけ、実は丸く辛みがある。葉を煎じたものはマラリアに効があるという。

るという。



㊪ マメザクラ

バラ科の落葉小高木。本州中部地方の山地に自生。葉は卵形で、縁に切れ込みがある。春、葉より先に淡紅色の小さい花が開き、六月ごろに黒紫色の実がなる。ふじざくら。



㊫ コブシ

モクレン科の落葉高木。山野にみられ、葉は幅広の倒卵形。春、葉より先に、大形の香ゆのある白色の六弁花をつける。秋に実が熟すと裂けて赤色の種子が垂れ下がる。名は、っほみが子供の握りこぶしに似ているのに由来。やまあららぎ。こぶしはじかみ。しんい。

《季春》「四つ目垣茶室も見えて一哉／漱石」



㊬ ヒマラヤスギ

マツ科の常緑高木。幹は直立し、枝は横に広がり、樹形は円錐形をなす。樹皮は灰褐色で、割れてはげる。葉は針状。秋に雄花と雌花とをつけ、翌年秋に長卵形の実を結ぶ。ヒマラヤの原産で、日本

には明治初期に渡来。ヒマラヤシーダー。



㊭ ソテツ

ソテツ科の常緑低木。高さ約三（メートル）。葉は羽状複葉で、幹の最上部に束生する。雌雄異株。雌花は大孢子葉が多数重なって球形、雄花は小孢子葉が多数らせん状に並んで紡錘形をし、受精は精子による。八丈島・九州南部から南に自生。関東以南の暖地では観賞用に栽培される。幹の髓や種子のでんぷんを食用にするが、発癌（はつがん）物質を含む。名は、枯れかかったときに鉄釘を打ち込むとよみがえるというのに由来。《季花＝夏》

九州南部から南に自生。関東以南の暖地では観賞用に栽培される。幹の髓や種子のでんぷんを食用にするが、発癌（はつがん）物質を含む。名は、枯れかかったときに鉄釘を打ち込むとよみがえるというのに由来。《季花＝夏》



㊦ マテバシイ

ブナ科の常緑高木。九州以南の海岸近くに生え、高さ約一〇メートル。葉は長倒卵形で厚く、裏面は褐色。六月ごろ、雄花穂と雌花穂とを上向きにつける。実はどんぐりで、あく抜きをせずに食べられる。防風林・都市緑化樹にも用いられる。さつまじい。まてばがし。まてがし。



㊧ エノキ

ニレ科の落葉高木。高さ二〇メートルに達する。葉は非相称の卵円形。初夏、淡黄色の雌花と雄花をつけ、秋に橙(だいだい)色で小豆大の甘い実を結ぶ。材は器具・薪炭用。江戸時代には街道の一里

塚に植えられた。え。《季 花=夏 実=秋》「懸菓(かけす) 鳴いて一の花をこぼしけり/句仏」



㊨ イチヨウ

イチヨウ科の裸子植物。一科一種。落葉高木で、高さ約三〇メートルに達する。葉は扇形で中央に裂け目があり、秋に黄葉する。雌雄異株。春、葉の付け根に、尾のような雄花、柄のある二個の胚珠(はいしゆ)をもつ雌花をつけ、四月ごろ受精し、九月ごろ精子によつて受精が行われる。果実は丸く、外種皮は熟すと黄橙(おうとう)色で、内種皮は白い殻となって種子を包む。種子は銀杏(ぎんなん)とよばれ、食用。幹や枝から気根を垂らす

ことがあり、乳(ちち)の木ともいう。中国の原産で、盆栽や街路樹に多用され、材は碁盤・将棋盤などに使われる。《季 黄葉=秋 花=春》「一散る遠くに風の音すれば/風生」



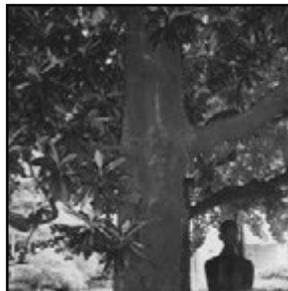
㊩ モッコク

ツバキ科の常緑高木。暖地の海岸近くの林に自生。葉は倒卵形で、厚くてつやがある。夏、白い小さな五弁花を下向きに開き、楕円形の朱赤色の実を結ぶ。熟すと裂けて赤い種子を出す。庭木とし、材は赤みを帯びて堅く、家具などに用い、樹皮からは染料をとる。厚皮香。《季 花=夏》「疲れたる身を一の花に寄す/月草」



㊪ カヤ

イチイ科の常緑高木。山野に自生し、高さ約二〇メートルに達する。葉は平たい線状で先がとがる。雌雄異株。四月ごろ花が咲き、翌年秋に楕円形の実がなる。実は食用油・頭髪油などの原料。材は堅く、建材・家具・碁盤・将棋盤や彫刻材にする。《季 花=春 実=秋》「一の実は人なつかしく径(みち)に降る/素逝」



㊫ タイサンボク

モクレン科の常緑高木。葉は大きく長楕円形で表面につやがあり、裏面に褐色の毛が密生する。五、六月ごろ、白色の大きな花を開き、強い芳香を放つ。北アメリカの原産で、日本には明治初期に渡来し、庭園で栽培される。《季 花=夏》「磔像(たくざう)や一は花終んぬ/誓子」



㊬ ヤマモモ

ヤマモモ科の常緑高木。本州中部以西の山地に多く、高さ約一五メートル。葉は長楕円形で、革質。雌雄異株。四月ごろ開花し、雄花穂は黄褐色、雌花穂は花柱が紅色。実は球形で、夏に紅紫色に熟し、食用。樹皮は染料、漢方では楊梅皮(ようばいひ)といい薬用。楊梅。しぶき。《季 夏》



㊦ アカンサス

1 キツネノマゴ科ハアザミ属の常緑多年草の総称。アザミに似て葉にとげがある。初夏、1.5メートルくらいの茎の先に唇形の花を穂状につける。地中海沿岸の原産。《季夏》2 西洋古典主義の建築・美術で、装飾文様に用いた1の葉形。アカントス。



本学徽章アカンサスについて

本学の徽章は、アカンサス (acanthus spinosus) の葉の輪郭を模様化した中に、「芸大」の2字を収めたものです。アカンサスの葉のもつ優雅な曲面と複雑で変化に富む輪郭線とに面白みを見出してこれを装飾モチーフとしてとり上げたのは、ギリシア人であった。周知の通り、コリント式の柱頭は、この葉で飾られています。そして、その後も、ローマ時代から近代にいたるまで、西洋では建築や工芸品の伝統的モチーフとして、広く用いられています。なお、本学構内の図書館横の庭や学生支援課入口付近にも、アカンサスが植えられています。



㊧ クロマツ

マツ科の常緑高木。東北から九州の海岸近くに生え、樹皮は黒褐色で、亀甲状の裂け目がある。葉は二枚ずつ対につき、針状で堅い。四月ごろ、雌花と雄花とをつける。材は建築や土木に、樹脂は燃料や香料に用いられる。雄松 (おまつ)。



㊨ イヌマキ

マキ科の常緑高木。関東以南の山地に自生し、高さは約二五メートルに達する。葉は扁平な線形または披針 (ひしん) 形で、密に互生。雌雄異株。庭園に植栽し、材は建築材などにする。名は、昔、杉をマキとよんだのに対し、この木を卑しんで呼んだことに由来するという。まき。くさまき。



㊩ ウメ

《「梅」の字音「メ」から変化したものという。平安時代以降「むめ」と表記されることが多い》バラ科の落葉高木。葉は卵形で縁に細かいざざざがある。早春、葉より先に、白・淡紅・紅色などの香りの強い花を開く。実は球形で、六月ごろ黄熟し、酸味がある。未熟なものは漢方で烏梅 (うばい) といい薬用に、また梅干し・梅酒などに用いる。

中国の原産で、古くから庭木などにし、品種は三〇〇以上もあり、野梅 (やばい) 系・紅梅系・豊後 (ぶんご) 系などに分けられる。松や竹とともにめでたい植物とされ、花兄 (かけい)・風待ち草・風見草・好文木 (こうぶんぼく)・春告げ草・匂い草などの別名がある。《季春》「二もとの一に遅速を愛すかな／蕪村」



㊪ モミジ

〔名〕(スル)《動詞「もみ (紅葉) ず」の連用形から。上代は「もみち」》1 晩秋に草木の葉が赤や黄色に色づくこと。また、その葉。こうよう。「美しく一した山」《季秋》「山くれて一の朱 (あけ) をうばひけり／蕪村」2 カエデの別名。また、その葉。3 襲 (かさね) の色目の名。表は紅、裏は青。一説に、表は赤、裏は濃い赤とも。もみじがさね。4 紋所の名。カエデの葉を圖案化したもの。5 鹿の肉。鹿には紅葉が取り合わせであるところからいう。



㊫ オリーブ

モクセイ科の常緑高木。高さ七〜一八メートル。葉は細長く、表面が暗緑色、裏面が銀色で、対生する。五〜七月ごろ、黄白色の香りのよい花を総状につける。黄緑色の実は熟すると黒紫色になり、油がとれる。地中海地方の原産で、日本では小豆島などで栽培。《季花=夏 実=秋》



㊬ タブノキ

クスノキ科の常緑高木。暖地の海岸近くに生え、高さ一〇〜一五メートル。葉は長楕円形で厚い。初夏、黄緑色の花が円錐状に集まって咲く。実は丸く、黒紫色に熟す。材は建築・家具などに、樹皮や葉は黄八丈の染料や線香に用いる。いぬぐす。たまぐす。やまぐす。



㊦ ミズキ

ミズキ科の落葉高木。山地に自生し、枝を横に伸ばす。葉は互生し、広楕円形で裏面はやや白い。五月ごろ、白い小花を散房状に密生してつけ、黒い実を結ぶ。根から水を吸い上げる力が強く、春には多量の水を含む。材

は白く、こけしや盆・箸などに用いる。ミズキ科の双子葉植物は主に温帯に分布し、アメリカハナミズキ・ハナイカダ・アオキなども含まれる。くるまみずき。《季花=夏 実=秋》「一咲き枝先にすぐ夕蛙／澄雄」



㊧ キンモクセイ

モクセイ科の常緑低木。よく分枝し、葉は狭長楕円形。雌雄異株。秋、強い芳香のある赤黄色の小花を密集してつける。中国の原産。古くから庭木とされる。《季秋》



㊨ ビワ

バラ科の常緑高木。四国・九州の一部に自生し、高さ約一〇メートル。葉は大形の長楕円形で、表面はつやがあり、裏面に灰褐色の毛が密生。秋から冬、黄色がかった白い花を密につける。夏、倒

卵形の実が黄橙色に熟し、食用とされる。《季実=夏 花=冬》「一黄なり空はあやめの花曇り／素堂」
「磯の香に峙（そばだ）つ山も一のころ／秋桜子」



㊩ アラカシ

ブナ科の常緑高木。本州中部以南の山地に自生。樹皮は緑がかった灰色。葉は堅く、楕円形で先半分の縁にざざざがある。春、尾状の雄花と上向きの雌花とをつける。実は

どんぐり。材は家具や木炭にする。くまかし。

樹木解説：『大辞泉』（小学館）より

『大辞泉』は以下の有料サイトで公開されています。

■ JapanKnowledge (ジャパナレッジ)
<http://www.japanknowledge.com/>
調べ物や研究に欠かせない、第一級の資料30以上を搭載した総合データベース。『大辞泉』以外に、『イミダス』『現代用語の基礎知識』『ランダムハウス大英和』などが検索できます。

■ JapanKnowledge Mobile (JKモバイル)
<http://jk.e-junction.tv/>
『大辞泉』のほかに、百科事典(『ニッポニカ』)のフルデータを検索できる、携帯初のサイト。
また、携帯サイトで唯一、全文検索機能を実現しました。
(小学館)